
慈 恵



平成27年 春季号

No.50

宗教法人 慈 恵 院 付属 多磨犬猫霊園



不二山自画賛

晴れてよし曇りてもよし不二の山

九十五翁 耕山

不二山を、サラリと青墨で描き、賛は柔らかく、まるでたなびく雲のように書す。まことにスツキリとして清い。

ことに不二の斜めの長い線には、その不屈の禅骨が、その賛には実に柔軟な心が窺われないだろうか。この歌はよく山岡鐵舟が書いているが、幾山河を越えさり来たった九十五歳の老師にとっては、それが実感であり真実だった。ゆえに鐵舟とはまた一味違って、独自の清新な風光を放つ。

「禅画報」より

上杉謙信と宗謙

上杉謙信もまだ輝虎と名のついていたところは、血気盛んな若者であった。

禅への志が高く、しばしば諸山の知識をたずね、学び得たものが多いつもりで慢心するところがままあった。たまたま米沢林泉寺に宗謙和尚という人がいて、その機鋒が非常に鋭いと伝え聞いた輝虎、

「宗謙の機鋒がいかに鋭いといっても、何ほどのことがあるう。われこそその鼻をへし折ってみせよう」

と、しのび姿に身をやつして、他の参禅者にまぎれて林泉寺の道場へ向かった。

ちようどその時、宗謙和尚は「梁武帝達磨初見の話」を提唱していた。きびしく、おごそかな法戦のまつさい中、流星にも似た和尚の眼光が、す早く輝虎のしのびの姿に飛んでくる。

提唱が終わるのを、今か今かと待ちかまえていた輝虎は、すぐに丈室へ向かい、入室独参にっしつどくさんを申し込んだ。その輝虎の右足が部屋に一步入るやいなや、和尚は大喝一声、「達磨不識の話、いかに合点いたしたか。さあ、一言いうてみなされ。さあ、早く」と切り込んだ。不意の一撃に答えるすべもなく、輝虎が擬議ぎぎする様子を見てとつた和尚は、たたみかけるように、「貴殿も一国一城の主として、平生いたずらに多言を弄して

おられるようじゃが、こんなことがなぜ説破できんのかな」

と心憎いほど悠然としている。輝虎は背に冷汗を覚え、ただ恥じるばかりである。初めて宗謙和尚の定力に心服した。和尚は静かに輝虎を見つめていった。

「この事を分かるうとするならば、まず大死一番することじゃ。一度、徹底して死にきつて来なされ」

輝虎はただちに退いて、その後数カ月、みずから参究し、深く省悟するところがあつて髪を剃り、入道した。以前、軽心慢心をもって大法を求めようとした時の非を悔い、改めて宗謙和尚の門に投じたのである。

宗謙は、輝虎の熱烈な求道の意気を感じて、さつそく自分の名の「謙」の一字を与えた。これより輝虎は名を謙信と改め、不識庵と号した。これは、達磨不識の話にちなむものである。

乱世の英雄上杉謙信も天正六年、壮途半ばにしてこの世を去つた。その遺偈ゆいげにいわく、

四十九年夢中酔 一生栄耀一杯酒

「禅門逸話集成」より

益翁えきおう宗謙そうけん（？〜一五七〇）

曹洞宗。林泉寺天室光育に法を嗣ぐ。林泉寺に住したのち、上杉謙信の開基になる妙照寺開山となった。



杉並区 イニシャル K・K(45)

コロナは熱中症による腎不全のため亡くなりました。ご飯を食べなくなり、10日間病院へ通い、最期の日まで頑張りでしたが、病院で死んでしまいました。突然のお別れでした。

夏の初めの頃から、新聞で何度もペットの熱中症対策を促す記事を目にしていたにもかかわらず、コロナはいつも元気だったので、熱中症にかかっていたとは全く気付きませんでした。私の注意が足りなかったと悔やんでも悔やみきれません。コロナに申し訳ない気持ちとコロナがないいきみしきとで押しつぶされそうです。「コロナはペット

ショップで私たちファミリーと出会って4年4カ月の命をもらえて充分幸せだった」と多くの方々からいただいた言葉に支えてもらっています。

コロナは生後一カ月半のときに我が家へやってきました。まだ耳が垂れていて毛もふわふわの赤ちゃんでした。外見もとてもかわいく、しぐさなどもとっても

とつてもかわいかったので、世界一かわいい子犬だと思いました。

長女が小学3年、長男はまだ幼児のおもかげのある小学1年のときでした。コロナと過ごした4年の間に長女は中学1年、

すっかり大人っぽくなり、長男は小学5年の少年となりました。夏休みの宿題では、犬がテーマの読書感想文を書き、図工や家庭科の作品にもコロナが登場しました。コロナが身近にいてくれたおかげで、子供たちは犬に興味を持ち多くのことを学び、コロナとともに成長しました。コロナと一緒に撮った写真に

は笑顔があふれています。私たちに楽しい時間やたくさん笑顔を与えてくれたコロナにとっても感謝しています。

コロナ！うちに来てくれてありがとう。

コロナ！私たちに笑顔をくれてありがとう。

迷ったら

また家においで

府中市 油 弘之(48)

容態が急変し、かかりつけの獣医さんへ向かうタクシーの中で、もう意識も殆どなく抱かれるに任せているお前の身体の、軽さが何より悲しかった……以前は子犬よりも体格のよい美丈夫だったのに。

意識は戻らなかつたけれど、酸素室の中で一時間余り頑張ってくれた。先生は仰つた「衰弱し切つてたけれど、元々の体力はある猫でした。」それだけに、

慢性腎不全の裏で進行していた肝臓の浮腫を、手の施しようがない段階まで見つけられなかったことが残念でならない。

今も、物陰から顔を覗かせるお前の残影が感じられてならない。意表を突いてお腹に飛び乗る手荒い起こし方が懐かしくてならない。

お前と初めて会ったのは一九九八年の七月か八月か。新しく移った賃貸マンションの一階のベランダに、いつの日から来るようになった年端もいかない仔猫。

「おい、お前はどこのニャンコスケ？」最後の三文字が名前の由来。

それから一年余は、こちらが仕事で不在のときは外、帰宅すると間もなくベランダで「にゃーん」の半飼いな半野良生活。

ただ、野良にしては非常に見てくれが良かったから、もしかしたら他の家でもお世話して貰えていたのかも。

そのうち管理人の知るところとなり、「猫を飼うのをやめるか、マンシオンを退去するかにして下さい。」の勧告。

まあ、ペット飼育可のマンシオンなんて分譲でも少数、賃貸では皆無の時代。結局お前を取って、当時珍しかったペット可の分譲マンシオンを買う羽目に（汗）真相を知る友人に呆れられたっけ。

まわりには誰にも断らずに連れてきたから、見ようによつては拉致監禁。

もともと半分は外猫のお前、完全室内生活に適応してくれるか、という不安は杞憂に済んだけれど、共同廊下を縄張りにして、一日数回の見回りは譲らなかつた。

マンシオン入居から十四年。おかげで近年、同階の住人は皆お前の存在を知っていた。

可愛い猫ですね〜と、他愛もない挨拶もとても誇らしかった。お前は皆さんに対して随分無

愛想だったけれども。

今日、葬儀の終わつたあと、お隣さんからお花を戴いた。

「自分も猫が好きなので、散歩を見ているのが楽しかった。居なくなつて寂しいです。」つて。

あの無愛想ぶりでも悼んで貰える、そこがお前の人（猫）徳なんだろう。

コスケ、十六年間どうもありがとう。お前は最高の相棒で、

最良の弟で、そして最愛の息子だった。できればまた、家に迷い込んできておくれ。

いたらない飼い主であることはバれてしまっているけれど。

テツへ

ペンネーム あみ(14)

テツがこの世を去つてから早くも二年がたちました。はやかつたような…おそかつたような…。

二年前の今頃はまだ、テツがいないことに悲しさや、違和感ばかり感じていました。でも今では、楽しかった思い出ばかりを思い出せるようになりました。

そして、テツに一つ報告があります!!それはうちに二匹ネコが来たことです。一匹はテツから名前をもらつてコテツとい

ます。コテツは優しく、少しくいしんぼうで本当にテツにそっくりな子です。

だからいつも、「テツと同じことしてる!!」とか、「テツはこのエサすきだったから、コテツもす

きかな?」と、テツのことを思い出したり、はなすことが今以上に多くなりました。

もう一匹は銀といつて、とんでもなく変な子です。(笑)

でもテツぐらいとつてもカワイイです!と、今はこんな感じ

ですごく楽しくすごしています。もちろんテツのことも、いつも思い出します。

そして今、色々考えるとテツ

が私にとつてもうちの家族にとつても大きい存在だったんだなと思いました。

テツは私が生まれる前からうちに住て、小さい時はもう一人のお兄ちゃんみたいでした。でも、私が大きくなつてからは弟

のようなそんな感じでした。もしかしたら本当の兄弟よりも一緒に居た時間が長かつたか

もしれません。だからこそ私にとつて、テツは大切な家族でお兄ちゃん、弟でした…。

そんなテツともう会えないのはすごくすくつらいけど、私に多くの思い出をくれたことに心から感謝して頑張ります。

テツはいつまでも私の家族・兄弟です。

またいつか会えますように…心から感謝を込めて…。

ことわざ